

言語力を育成する国語科授業 3

学図小1国語の第4単元は「じゅんじょをたしかめながらよもう」です。めあてには「文しょうとしゃしんからじゅんじょをたしかめましょう」「じゅんじょがわかることばを見つけましょう」とあります。

これは「ア 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。」というC読むこと（説明文）における構造と内容の把握にかかる学習内容です。

(1) 第4単元「まめ」を読む子どもたち

新たな教材に向かうとき、子どもたちは自身に内包する見方・考え方を働かすと前回申し上げました。

学習事項「順序」の徹底

単元の第1教材も同様です。今まで説明文系統でお話ししてきましたが、文学的文章である「はじめは『や!』」は、ようすをおもいうかべてよもうで「かいてあることをたしかめながら…」ですが、てびきの1には「…えにばんごうをつけて」あらすじをたしかめるなげかけがあります。お話し順番ですね。

上巻には「かぞえうた」があって一から十の数を学びます。これは「えにつきをかこう」で生かされます。下巻ことばのいずみ②で「日づけとよう日」で、さらにこれが補完されます。1年の学習は「順番」「順序」が重要な学習事項なっていますから、数は論理を構成する重要な要素です。

気づきをうながす編集

気づきをうながす編集も特質すべきです。

上巻「えからみつけたよ」は「が」と「に」の働きを意識させつつ「どこがかわったか」につないでいます。「がっこうでみつけたよ」については前回取り上げました。これも「気づきをうながす」編集です。下巻には「見て、きいて、さわって」があり、し「だいこんのたねをまいたよ」があって「みなさんも、みのまわりのものをかんさして、目やはな、みみなどで、かんじたことを、しにかいてみましょう」とあります。

そしてまた、何回か表を使いカードに整理するという情報整理を学んでいます。

このような学びを積み上げてきた子どもたちが、第4単元読み教材「まめ」を読もうとしているのです。

教材「まめ」の特質は豊かな写真とそのメッセージです。連続型テキストと非連続型テキストが響き合うように編集されていますが、子どもたちは「いきものあし」や「くらしをまもる車」で学んだ見方・考え方を働かせながら、「文しょうとしゃしんからじゅんじょ」を学ぼうとするはずです。

(2) 学びは個において成立

Uchida は見方・考え方について、既習の国語科教材に込められた学習事項の系統性をもとに述べてきましたが、子どもたちは、「まめ」に至る国語科の学習事項だけで、見方・考え方を働かせているわけではありません。

今次指導要領の改訂は、あたかも、攻め込まれないことを第一義に山などの要害に築かれていた山城から、大阪城が典型であるように、城は平地に置いて産業や商業とともにあって、水運など、それらを支えるインフラも整備し、さらには他国、他者等外部勢力とも連携しつつ、城下の総合的な発展を図る、その核としての城になっていったのと似ています。

「学び」は個において成立しています。その個は全教育課程、全生活で学んでいます。ですから、指導にあたっては、関連し合う他教科をはじめ教育活動全般を視野に子どもの学びを見つめるべきなのです。

そういう意味では、道徳科における「総合単元学習」(注1)は着目されるべきです。複数の内容項目とそれらに関連する教科等の学習及び子どもの生活体験を構造化して、本時を構想し、道徳性の育みを目指す。学校教育全体の道徳教育の要としての道徳科との関係を構造化したものとと言えますが、一人の子どもにとっては、こ

のように図式化しなくても、それらは学習体験、生活体験として内包されて、道徳では潜在的な価値観になり「見方・考え方」となって、「その子」らしさになって、本時の価値内容に対面しているのです。

しかしながら、計画的・組織的・継続的に教育する学校が、「学ぶ側」にたつて、つまりは、一人の子どもの側にたつて眼前の子どもの学びを見つめて教育活動を構想してきたかといえは??です。

(3) 教科横断的な学びを見つめる

第4単元「まめ」に戻します。

「まめ」はまめの成長を説明した文章で、先に述べたように、子どもたちは、まめの成長を文章と写真から読み取り、順序を表すことばを見つけていきます。

この教材「まめ」を学ぶ以前に子どもたちはたねの成長を体感しています。生活科「わたしのあさがお」（学図小1）の学習です。

「どのたねをまこうかな」ではじまり、「たねをまこう」「みてみてめがでたよ」「だいにそだてるよ」「もっとおおきくなってね」

「さいたさいた」「たねができたよ」などと続いていきます。そして、この間、「ものしりのうと」であさがおの成長を観察日記のようにして記録するとともに、「のうと」では栽培がガイダンスされています。そして、「きのうとくらべてどうか変わったかな」などと気づきが促されているのです。

生活科は具体的な活動や体験の中で様々な気付きを得て、自立への基礎を養うことをねらいにしてきました。今次生活科の改訂の要点には次のような記述があります。

具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考え、気付きを確かなものとしたり、新たな気付きを得たりするようにするため、活動や体験を通して気付いたことなどについて多様に表現し考えたり、「見付ける」、「比べる」、「たとえる」、「試す」、「見通す」、「工夫

する」などの多様な学習活動を行ったりする活動を重視する…略…

・各教科等との関連を積極的に図り、低学年教育全体の充実を図り、…略…（注2）

子どもたちは、国語科「まめ」を学ぶ前にあさがおの栽培活動をとおして、一連の「あさがおの成長」を体感しています。

説明的文章「まめ」には、問いの文がなく「まめはたねです。生きています。」で始まりますが、子どもたちは、この冒頭に「わたしのあさがお」を重ねて、文章内容を概観し、「まめ」は「たねであり、生きている」ということの意味を問いながら読み進め、最終段における「まめはたねです。土にまくと…」以下でまめが生きていることの解を得るのです。

そうして、ことば（文章）と体験とが響き合い、文章内の「そして」「やがて」「しばらくすると」のような「じゅんじょがわかることば」は、子どもの中で、意味のあることばとなって、生きて働くことばになっていくのです。

学びは個において成立すると申し上げました。繰り返しますが、眼前の子どもは、国語なら国語だけ、生活科なら生活科だけではなく、全教育活動で、全生活で学んでいます。そう理解すると、今次改訂の指導要領におけるカリキュラム・マネジメントは教育課程経営の側面（注3）としての意義から、一人の子ども理解、健やかな成長を扶ける営み、さらにはそのための指導法の工夫改善へと広がりを見せて、その重要性が伝わってくるのです。

注1 「考え、対話する道徳」でモラル・アクティブ・ラーナーを育てる—プロジェクト型総合単元的道徳学習の充実—他で武庫川女子大 押谷由夫教授が提唱。

注2 指導要領解説生活科（2）改訂の要点p7

注3 指導要領第1章 第1の4

児童や学校及び地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと…以下略